

東京歌会（第七十六回）

平成三十一年二月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二首十二首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、丸山弘子、松井淑子）。

駅前のカフェに坐りて目の前を行き交ふ人の行方を思ふ

中川禮子

駅前なので人がいきかう。その人たちの行方とじぶんにはとりあえず何の関係もない。行方には目的のようなことも含まれる。それぞれの人にそれぞれの行方。思いは一つ。作者は今、ただ坐っている人である。

早朝の窓をのぞきて雪のなく庭の窪みにうす氷あり

市川茂子

予報で雪が降ることが、一首目にある。上句、やや一続きに詠む。下句で、雪の代わりに似たものを詠っている。何か省略がある。（早朝の）庭をのぞきて、だろうか。何気ないが、生活感が出ている。

重ね着の意味には非ずきさらぎは草木の再生する季と知る

林 博子

ちなみに、てもとの『新明解国語辞典』（第五版）でも、きさらぎは、衣更着、すなわち寒さがきびしく、重ね着をする意という、とある。ある辞書には、生更ぎとしてこの歌のような意味が載るといふ。思い込みが正されるようだ。同時に歌は季節の歌になっている。

鶴岡の水族館のクラゲ占ひ「カッター勝利」は当たりであつた

布宮慈子

サッカードに興味も関心もある、また応援しているという人は多いだろうが、これはその勝敗を予めクラゲで占うというもの。ここでは占いの当たり。県内の鶴岡（市）。「サッカードのアジアカップ決勝は日本敗れてカッターの勝ち」が一首目。こちら、電光掲示板のニュースを読むようでもある、歯切れよさ。

卒業式には早しと思ふも満開の紅梅に寄る和服の少女ら

丸山弘子

思（も）ふも。いかにもめでたい様子。紅梅であり、それも満開。和服で少し議論することになった。ここは振袖としたらいい、という。

若ものら飯山駅でみな降りて棚の荷もみな消えてしまいいぬ

小野澤繁雄

北陸新幹線の駅。若ものら、はスキー客だろう。一斉に降りてしまった。作者は残っている乗客である。下句がおもしろいという。

東京歌会（第七十七回）

三月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二百十首。
出席者三名（小野澤繁雄、丸山弘子、松井淑子）。

新宿の地下広場に棲む鳩の番たくみに人込みすりぬけて行く

林 博子

番（つがい）。大抵二羽でいる、とも。地下広場から西口か。たしかに鳩が多いとも。池袋駅地下道にも鳩がいて、人込みを苦にしているという。都会に棲む生き物の生態の一つ。作者がみたもので、み方に面白さがある。

五月菜はゴガツナなればサツキナと呼ぶことなけれ東京の娘よ

布宮慈子

実際に、サツキナと呼んだのか。見た目は菜の花に似ているという。五月菜は山形、福島（県）でみるという記事を読んだ。歌のなかでは、初句にもどって、ごがつな、と読むことになる。東京でない、親が住む場所に住んだことのない娘だろうか。むしろ東京がせつない。

終日の雨に花々色冴えて櫛の下枝に朱き実残る

市川茂子

終日の雨もめずらしいのだ。上句で花々の色に触れ、下句では色名を出して、しかも実に触れている。文字数の少ない歌だが、といって、ひらがなにひらけない語句がほとんど。櫛にも実はあるだろうが、その朱き実には意外性がある。朱はだいたい色に近い赤のこと。下枝といっても高さは眼の前くらいか。庭の櫛。雨のなかの色彩。

加賀白と名のる梅の木陽だまりに花咲き初むるホツリホツリと

丸山弘子

検索では、白色の加賀絹のことでもあるようだが、ここでは梅の栽培品種の一つ。名のる、は何か銘でもあったのだろうか。名前からも白梅である。咲きはじめはそう目立たない。また、かたまつて咲くこともない。ホツリホツリと、の通り。季節の歌。

つんつんと立ちたる枝は白加賀に花の香かがんと近寄りもする

小野澤繁雄

白加賀、読みはしろかが、しらかが、もある。枝が真つすぐ立っていて、それは白加賀で、香はするよう नाही ような。それで近寄ったという歌。梅の香りも、はなれたところでもしるするということがある。梅林のようなところか。立ちたる枝の、とした方が読みやすい。

東京歌会（第七十八回）

四月十八日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二。詠草は各二首八首。出席者四名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

あふれ咲く桜見上げるまぶしさに花さか姫の心地しており

市川茂子

姫（おうな）は年とつた女。み上げることでもまぶしいということがあがるが、桜花が空に溢れて、そこに参入している感じか。じしんを花咲か爺（じじい）ならぬ花さか姫とした。そんな心地ということだが、ある種踏み込んだものがある。

切り花も出会ひとひとつ町中の花舗にことしのアネモネを購ふ

丸山弘子

二句の、出会ひとひとつ、がややわかりにくいという。出会ひと同じ、くらしいの意味か。町中（まちなか）は、町なか、としたい。「うなじ垂れてわれの歩める新宿の市なかにして柿の花落つ」（清水房雄『一去集』）がある。アネモネは春に咲き、（切り花用に）草丈の高いものもあるようだ。外出して、そこでのひとつの行為。

二つ星てんたう虫がやつてきて家内やぬちにをれば憩やすみへるころ

布宮慈子

（二つ星）てんとう虫を話題にした。益虫でアブラムシを駆除してくれる、という。じぶんの中からだにとまらせることで幸福の前兆となる、心配事が飛んでゆく、とか、そんなことも記事に出ている。何か窓をあけていたかして、春の到来、外光のなかでのてんとう虫のうごきがそのまま屋内のものになった。憩へるころ、ということも、季節感と関わるのだろう。余りみなくなつたてんとう虫。上句、やや絵本風と。

外でよくみかける人が園にいて彼からすればわれがその人

小野澤繁雄

これはわかるとも。その人からすれば、こちらもよくみかける人、となる。読んでいて、下句がまだ動くようだ。みかける、から、彼からみればわれもその人、とするなど。

（報告：小野澤繁雄）